アフリカ民族に倣え～私立中学割礼物語～

ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
アフリカ民族に倣え～私立中学割礼物語～

【Ｎコード】
Ｎ６０４９Ｏ

【作者名】
ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

【あらすじ】
　東京都にある架空の私立中高（男子校）で新入生を対象に、４月下旬に行われる通過儀礼の様子を描きます。全員、麻酔なしで一番大切且つ敏感な部分の包皮をきりおとされるのである。

私立中学をめぐる競争は益々激しさを増し、生徒獲得を狙って各学校は個性を強調するようになった。偏差値は４０そこそこ、受験勉強をしたものならば基本的には入れるといった男子校である東京都の大崎学院が打ち出した政策、それは「厳しい社会を生き抜いていく、たくましい日本男児の育成」であった。そのスローガンに違わぬカリキュラムが組まれていた。１年次から体育に加え、剣道・柔道・相撲が週に１時間ずつ必修となり、剣道寒稽古や寒中水泳なども特徴となっていた。校外学習では遠泳・登山・競歩にフルマラソンなど６年間を通じて強靭な肉体と精神を育成することがウリであった。

大崎学院では掲げるスローガンの理想像として、１つにはマサイ族などアフリカの民族を挙げていた。青年期という曖昧な期間がなく、子ども時代を終えると通過儀礼を受けて大人として一人前に扱われる。ライオンなどの大自然をも相手とし、狩猟を生業とする厳しい暮らしである。その民族が通過儀礼として用いる割礼、つまり男児のペニス包皮を切り落とすという文化を出来るだけ再現すること、それが現代の日本において大崎学院が生き残り策として打ち出した目玉企画である。無論、強制的にやろうとすれば、保護者からの反発は予想された。だから入学の時点で誓約書の中に包皮切除を受けることを目的を添えて盛り込んでいた。この学校に入学を申し込んだ以上、この儀式からは避けられないのである。

古典的なこの儀式は４月、入学から間もない月末に行われる。５月連休の前に学校で実施し、連休中に傷を治すという作戦である。スポーツテストやガイダンスが終わり、まだ部活動に入部前というこの時期は学業にも影響が出ないので最適だった。入学時点で、５月連休中の遠出やスポーツは避けるよう指示が出ていた。君たちは中学に入学し、これからは電車運賃などの面でも大人として扱われ

る、だから子ども時代にケジメをつけるべく一番大切な部分に対し通過儀礼を行うと説明される。

今日はこれから儀式が行われる。大崎学院は1クラスに男子生徒が約30名、それが3クラスある学校である。大崎学院の校庭は東西南北に並んだ校舎の中央、中庭にある。大きなテントを張ってしまえば、外から見える心配はなかった。3クラス同時に作業が出来るくらいの広さがある。その日の午後2時限を利用して割礼を行う。昼休みが終わると全員が上半身は体操着に、下半身はパンツまで脱いで各自が持参したタオルを腰にはおり、中庭のテント内へ集まる。タオルは恥ずかしいから隠すという目的ではなく、必要以上に血が中庭につかないようにするという意義が強い。

クラスごとにテントに入ると執行担当の体育教官が全員のペニスをチェックする。保健室に校医が待機はしているが、原始的な儀式を行うのに医師は基本的に帯同しないのだ。中学に入学したばかりの男児の中にはまだ陰毛が生えていないものも3人に1人くらいはいる。ほとんどは生えていても少々であるので儀式に影響しないが、クラスに数名は相当量の陰毛がある者もいる。そういった者に対してはその場で、教官が手に持ったバリカンで毛をそり落とす。もう一点、切るだけの包皮があるかどうかを確認も直前のチェックで行う。学校側としては出来るだけ儀式を行いたい。したがって自分で剥いたようなものならば強引に皮を引っ張って戻してしまう。それでも学年に2~3人は、力いっぱい皮を引っ張っても切るだけの余りが出来ない生徒がいる。幼少期に手術を受けている場合や先天的に皮が短い場合などである。こういった場合のみ、割礼を免除して教師の助手として任務にあたらせる。

さて、儀式は出席番号順に3人一組となる。包皮を切るのに麻酔を使うわけではないので当然ながら激痛が走る。それを押さえつけるのにクラスメイト2人と担任教師1人のペアで行うわけだ。担任教師はジャージ姿であるが、押さえつけるクラスメイトは全裸である。腰に巻いてきたタオルは自分が切られる際に床へひいて使う。まず最初にすることは互いの包皮に糸をくくりつけることだ。出来るだけ糸を固く結び、引っ張りやすいようにする。途中で糸が外れることがないよう、二重三重にくくる。手を離すと皮の先から糸が垂れ下がった状態になる。ところで生徒たちが騒いだり逃げたりしないのには理由がある。もし叫び声をあげたり逃げようとした者は更にハサミで切り込みをいれるなど厳しい罰を科すということが事前に告げられているからである。ただでさえ痛いのに、意図的に痛みを与えられてはたまったものでない。それに同い年のクラスメイトが皆耐えているのだ。男の意地として逃げたり泣いたりは出来ない。

最初にB組のテントで準備が整ったようだ。B組の出席番号1番、相澤君の割礼がいよいよはじまる。2番の赤坂君と3番の伊藤君、担任の森口教諭がおさえつける。アフリカでは丸太の上にペニスを乗せて包皮を切るが、さすがに丸太というわけにはいかない。そこでちょうど良い大きさの大理石で作られた板を使用する。相澤君はタオルの上に尻をおき、大きく足を広げた。体育科の竹田教諭が糸を力いっぱいに引っ張り、あまった包皮が板の上に乗るようにした。糸の先を床においた錘にしっかりくくりつけ、皮が戻らないようにした。正面を森口教諭が、左右を赤坂君と伊藤君が押さえつける。しっかり押さえつけておかないと大怪我の原因になるので、力をこめていた。竹田教諭は伸ばした皮の一番根元側、つまり亀頭ギリギリのところに鋭利な刃物をおいた。少しでもずれると亀頭を傷つけ

てしまうから慎重さが何よりも求められる。切る際、目をそらすことは許されない。本当は寝かせたほうが切りやすいのであるが、大人になる瞬間をしっかり目に焼き付けさせるため、座った状態で足を大きく広げさせているのだ。そして、執行担当の体育教官が３秒前の声をかけると、切られる生徒は自ら３・２・１と大きな掛け声をかけるのだ。声が小さいとやり直しをさせられるので、相澤君も腹から思い切り声を出して数えた。

竹田教諭は左手に刃物を持ち、しっかり固定した。右手に大きなハンマーを持つと３秒前だと告げた。３・２・１の続いた次の瞬間、竹田教諭の右手が振り下ろされ、刃物が包皮を貫通してペニス本体と引き離された。相澤君は叫びそうになったが、歯をくいしばりグッとこらえた。助手の生徒が血がついた相澤君の亀頭に止血と化膿止めの薬を塗った。その痛みに再び顔をしかめるその姿は、まだあどけなさが残る少年そのものである。

各テントで次から次へと皮が切り落とされていく。Ｂ組のテントで最初に相澤君をおさえていた赤坂君が次にタオルをひいて座る。引き続き３番の伊藤君と森口教諭、そして新たに４番の江藤君が押さえつけ役に加わる。最後の生徒は相澤君が押さえつけに回る。中には皮を厚く重ねた状態で糸を結んでしまったのか、うまく切れない生徒もいる。その場合は何回も刃物をあて、皮を引きちぎるようにして切り落とすので痛みも倍増である。大きな声をあげて体育教官から平手うちを頬に見舞われたものもいた。

儀式が終わった後の生徒たちは、ほとんどが亀頭丸出しである。皮を思い切り引っ張られているので、亀頭を覆っていた包皮のほとんどは切り落とされてしまうのだ。皮を切り落とされた生徒はテン

トの中にタオルをひき、しばらく仰向けで休憩する。その間にも次々とクラスメイトの包皮が切り落とされていくのだ。切り落とされた包皮は通過儀礼の記念として一人ひとりに渡され、ジップロックに入れて各家庭に持ち帰る。

傷口が収まったら、塗り薬と切り落とされた包皮を持って教室に戻り、制服に着替える。そして各自、帰途に着く。大抵の家ではその夜、息子が通過儀礼を終えて大人になったお祝いが行われる。生徒たちは喜ばしい思いがないわけでもないが、それよりも股間の痛さが勝る。その痛みに耐えながら、中学校生活最初の連休を過ごすのである。

（後書き）

痛さが伝わってもらえたなら嬉しいです。こんな学校がひとつくらいあっても良いと思います。